

久邇宮邦彦王「兼堂詩抄」注釈

内 田 誠 一

要 旨

『邦彦王行実』（久邇宮蔵版、一九三九年）の中の「桃林餘影」に収載されている久邇宮邦彦王の作られた漢詩二十首について注釈をつけた。

キーワード

久邇宮邦彦王・「兼堂詩抄」・漢詩・皇族・宮家

一、はじめに

本稿では、『邦彦王行実』（久邇宮蔵版、一九三九年）の第十七章「桃林餘影」に採録された久邇宮邦彦王の漢詩全二十首について注釈を付すことを試みた。王の作品は数百首にのぼるとされるが、まとまって公刊された作品はこの二十首である。まず今回は、「桃林餘影」に採録された作品に限って注釈を加えることとした。王は書法にも長じておられたので、自詠漢詩を認められた書幅が少なからず残されている。本稿脱稿の後は管見の及ぶ限り、書幅に遺された御作を順次翻刻し注釈を付していきたいと考えている。本稿では御作二十首について、仮に「兼堂詩抄」と名付けた。「兼堂」は王の雅号（なお、少年時代の雅号は恭堂）である。将来は、ひと巻の『兼堂詩抄』とすることができればと夢想している。

敬称・敬語については、史家の仕法に倣って最小限度にとどめた。

二、邦彦王の漢詩

近代日本の皇室においては、大正天皇が東宮御用掛の三島中洲の手ほどきにより十八歳から漢詩を創作されておられ、膨大な数の御製漢詩を『大正天皇御集』に見ることが出来る。石川忠久博士の『漢詩人 大正天皇―その風雅の心―』（大修館書店、二〇〇九年）に、「明治二十九年から大正六年までの二十二年間に、実に千三百六十七首の漢詩を遺された。この数は歴代天皇中第一位である。因みに、その次は後光明天皇（第一百代、江戸初期）の九十八首」とある。貞明皇后も天皇の影響を受けられたようで七十一首の御詩を遺されている。天皇皇后が揃って漢詩を好まれたことは、当然、周囲の人々にも多大な影響を与えたと考えられよう。大正天皇の直接的影響が指摘されてはいないものの、好んで漢詩を創作された皇族として、すぐに思い浮かぶのが久邇宮邦彦王である。王の漢詩について、『邦彦王行実』（久邇宮蔵版、一九三九年）の第十七章「桃林餘影」では次のように述べられている。

王の漢詩に就いては恭堂と号せられし少年時代より御研究になり、壮年に至るに及んで益々円熟の域に達してゐられた。…（中略）…実に「詩は志を言ふなり」と称し、自らの思想感情を其の儘発表するもので、現実に其の興趣を味はざる他人の添削の如きは全く其の意味をなさぬとのお考にあらざりしかと拝察する。王は常に事に触れ、物に応じての感興を其の儘豊富なる詞藻に依つ

て表現せらるるにより、其の詩句は精神流露、真に澁刺として全く斧鑿の痕なき大自然に接するが如く拝せられる。而して其の作什は亦頗る多く概ね数百首に上るであらう。

内田按ずるに、漢詩というものは、詩作に長じた学者や漢詩人の添削を受けると、必ず見栄えの良いまとまった詩になる。しかし、まとまりすぎると、個性の無い平凡陳腐な作品となることがあるので、過剰な添削は作者本来の詩情を損なう恐れがある。王もそのあたりのことを考慮されていたのではないか。

朝彦親王に始まる久邇宮三代の第二代が邦彦王である。王の略歴を次に挙げておく。

邦彦王（一八七三―一九二九）は、朝彦親王第三王子。母は女房泉萬喜子。京都府立中学・学習院を経て、東京の成城学校卒業。陸軍士官学校、陸軍大学校を卒業。以後、第十五師団長・近衛師団長を歴任して、陸軍大将となる。薨去後、元帥を追贈。妃は旧薩摩藩第十二代藩主・島津忠義公爵の第八女・俣子（一八七九―一九五六）。邦彦王第一王子の朝融王（一九〇一―一九五九）は久邇宮第三代。なお、第一王女の良子女王は、のちの昭和天皇の皇后である香淳皇后。

三、「兼堂詩抄」注釈

では、王の漢詩二十首を掲げ、詩語や詩句について注釈を施すこととする。

賦得春寒花較遲（賦し得たり 春寒 花較や遅きを）

行雲片片雪纒晴 行雲片片 雪纒かに晴れ

氷満小池水不平 氷は小池に満ちて 水は平らかならず

野外猶寒花信塞 野外 猶ほ寒く 花信塞ぐ

黄鳥未囀煖陽生 黄鳥 未だ囀ぜずして煖陽生ず

明治二十三年一月、花の訪れも遅い様子を詠じた作。

○小池：渋谷区宮代町一番地の三万坪に及ぶ久邇宮邸には池があり、スケートも楽しめたようである。本詩では、邸内の池を謙遜して「小池」と詠じているのかもしれない。○花信塞：「花信」は花だより。「塞」は、花便りが一向に来ないの意か。○黄鳥：チョウセンウグイス（学名：Horornis borealis）。黄鸝。○煖陽：暖陽。あたたかい太陽。

紀元節（紀元節）

群臣陸續到王宮 群臣陸續として 王宮に到る

艷麗日旗纒市中 艷麗たる日旗 市中に纒る

懷昔神皇開国業 懷ふ昔 神皇 開国の業

畝陵遥拝想勲功 畝陵 遥拝して 勲功を想ふ

紀元節に神武天皇の建国の功績に思いを馳せた作。

○王宮：宮城。皇居。○日旗：日の丸の旗。○神皇：ここでは特に神武天皇を言う。○畝陵：奈良盆地南部に位置する畝傍山の北東の麓にある神武天皇陵。

春江花月夜（春江花月の夜）

満樹梅花二月天 満樹の梅花 二月の天

一輪素娥照江辺 一輪の素娥 江辺を照らす

今宵放艇事遊邀 今宵 放艇して 遊邀を事とす

遠岸帶烟春自妍 遠岸 烟を帯びて 春 自から妍なり

河辺に梅花の咲き乱れる春の夜に、舟遊びをしたことを詠じた作。

○起句は句中対。○素娥：月に住むという女神の姮娥。ここでは月の意。○放艇：舟を並べる。放舟。「放」は並べるの意。○遊邀：遊覧する。

月夜圍碁（月夜囲碁）

對座松窓下 對座す 松窓の下

圍碁黑白争 圍碁 黑白争ふ

前庭疑有雪 前庭 疑ふらくは雪有るか

清夜寂無聲 清夜 寂として声無し

月の輝く夜に囲碁の対局を行なったことを詠じた作。

○松窓：松の見えるまど。転じて別荘や書齋のまど。○転句：前庭を明月が照らしているのを表現した。李白「静夜思」に「牀前看月光、疑是地上霜」とあるのを踏まえつつ、「霜」を「雪」に変えている。同様に、結句の「清夜」も李白詩の「静夜」の「静」を「清」に変えたものか。

御題暁山雲（御題 暁山の雲）

層巘排雲顯 層巘 雲を排すること顕らかにして
 紅霞彩暁天 紅霞 暁天を彩る
 雞鳴知歲始 雞鳴きて 歳の始まるを知り
 萬物競新妍 萬物 新妍を競ふ

新年歌会始の御題「暁山雲」で詠じた漢詩。

○御題暁山雲：「暁山雲」は、大正十二年の新年歌会始の御題。邦彦王妃である倪王妃は、同年の歌会始で「山の端にたたよふ雲そしらみたる朝日のさすもほとなかるらし」と詠進している。○層巘：重なりあつた山。○新妍：新年のあでやかさ。

元旦試筆（元旦詩筆）

瑤華皓皓玉玲瓏 瑤華皓皓として玉玲瓏たり
 天霽瞳矓旭日紅 天霽れて瞳矓 旭日紅し
 萬戸千門松竹緑 萬戸千門 松竹 緑なり
 迎春四海瑞雲籠 春を迎へて 四海に瑞雲籠れり

大正十年の元旦の様子と心情を詠じた作。

○起句：（大晦日に降った）雪は白く輝いており、玉のように清らかである。○瞳矓：夜が明け染める。○万戸千門：本来は「千門万戸」（平仄仄）とすべきところ、平起式の本詩では、転句の第二字を仄字とすべきことから、語順を入れ替えて「万戸千門」（仄仄平）とした。○瑞雲：めでたいしるしの雲。

立春所懐（立春所懐）

漸會立春嬉可知 漸く立春に会ひて 嬉しきこと知るべし
 宿寒將去解愁眉 宿寒 將に去らんとして 愁眉を解く
 日暄送舊水融處 日暄 旧を送り 水融くる処
 風暖迎新梅發時 風暖かにして新を迎へ 梅発く時
 陰極陽回芳信動 陰極まり陽回りて 芳信動き
 西行戌至兔烏移 西行き戌至り 兔烏移る
 網繆牖戸須爲備 網繆牖戸 須らく備と為すべし
 不使冬來再履危 冬をして来らしめ再び危きを履まじ

大正十一年、立春の訪れの喜びを詠じた作。

○宿寒：かねてよりの寒さ。○愁眉：心配して寄せる眉。ここでは、（厳しい寒さに）苦しむ表情を言う。○日暄：太陽が暖かい。○陰極陽回：冬が去り春が来る。○西行戌至：酉年が去って戌年になったことを言う。○兔烏：月日。月に兔が住み、日（太陽）に鳥が住むとされるので言う。○網繆牖戸：災難を防ぐために、窓や戸を修繕すること。網繆は疊韻語。

應鶴見總持寺貫主囑、寫大般若經一卷、書懷

（鶴見総持寺の貫主の囑に応じて大般若經一卷を写し、懷ひを書す）

寫經奉佛思慈親 写經奉仏して慈親を思ふ
 明鏡菩提恰若神 明鏡菩提 恰も神の若し
 般若曇摩道安在 般若・曇摩・道安在り

願將淨理洗心塵 願はくは淨理を將つて心の塵を洗はん

鶴見の総持寺の貫主の依頼で大般若経を写経し、思いを書き表した作。

○明鏡菩提：慧能の二つの偈「菩提本無樹、明鏡亦無台。仏性常清淨、何処有塵埃」「心是菩提樹、身為明鏡台。明鏡本清淨、何処染塵埃」を踏まえる。○転句：「般若」は北インドから来た訳経僧の般若三藏。「曇摩」は南インドから北魏に来た曇摩流支。「道安」は東晋の釈道安。○淨理：仏理。

雪中立春（雪中立春）

昨夜狂風舞玉英 昨夜 狂風 玉英舞ひ
今朝眞是白銀城 今朝 眞に是れ白銀の城
節迎木徳春猶淺 節は木徳を迎へて 春猶ほ浅し
笑對菜盤酒滿觥 笑ひて菜盤に対せば 酒 觥に満つ

大正十二年、一夜明けて白銀のまちとなった立春の朝を詠じた作。

○玉英：雪。○木徳：万物を育てる春の徳。『令記』月令に「某日立春、盛徳在木」とある。○菜盤：主菜を盛る盤子（さら）。○觥：つものさかずき。ここでは単に杯の意。韻字を「庚韻」で統一するため「觥」の字を用いた。

拜白峯陵（白峯陵を拝す）

聖陵奉拜白峯陵 聖陵 奉拜す 白峯の陵
老樹陰森蔽磴前 老樹陰森として磴前を蔽ふ
憶昔衰龍南狩日 憶ふ昔 衰龍 南に狩るの日
悲風吹面晚秋天 悲風 面を吹く 晩秋の天

大正十二年五月、崇徳天皇陵奉拝を詠じた作。

○白峯陵：崇徳天皇陵墓。香川県坂出市青海町にある。○磴：石を敷き詰めた山道。○衰龍：天皇が着用した衰龍の御衣（中国式の礼服）。ここでは崇徳天皇を言う。○南狩：奔南狩北。天皇が讃岐に配流されたことを言う。

賽金比羅宮（金毘羅宮を賽す）

神威赫奕翁人心 神威赫奕として 人心に翁ふ
賽客繹如千里尋 賽客 繹如として 千里を尋ぬ
石磴連空楓樹赤 石磴 空に連なり 楓樹赤し
象頭山頂夕陽沈 象頭山頂 夕陽沈む

大正十二年五月、金毘羅宮を参拝した際の作。

○金毘羅宮：香川県仲多度郡琴平町の象頭山の中腹に鎮座する神社。ご祭神は大物主命と崇徳天皇。○神威赫奕：神の威光が盛大である。○翁：一致する。協う。○繹如：絶えないさま。続くさま。

○石磴：石の階段の参道。○象頭山：標高五三八米。

觀五稜郭（五稜郭を觀る）

五稜荒郭草芊芊 五稜の荒郭 草芊芊

日淡風寒北海天 日淡く風寒し 北海の天

攻守當年忠勇士 攻守す 當年の忠勇の士

只聞松籟與啼鵲 只だ聞く 松籟と啼鵲と

大正十二年七月、函館の五稜郭を觀覽し、函館戦争の昔を追懐した作。

○五稜郭：箱館（今の函館市）に築城された五稜星形の城郭。元治元年に築城工事が完成し、箱館奉行所を移転した。○芊芊：が茂って盛んなさま。○転句：新政府軍と旧幕府軍が戦った箱館戦争を追懐するも、今は松風と杜鵑の鳴き声が聞こえるばかりであると詠じている。

新年試筆（新年の試筆）

青亭東來物候妍 青亭 東より来たり 物候妍なり

旭旛旖旎颺風鳶 旭旛旖旎して 風鳶颺がる

正逢獻歲卿雲爛 正に獻歲に逢ひて 卿雲爛す

山色連天瑞氣鮮 山色 天に連なり 瑞氣鮮かなり

大正十四年の新年の書初めの作。

○青亭：トンボ。○物候：四季の変化に応じた風物。○旭旛：国旗（日章旗）。詩意から考えて軍旗（旭日旗）ではあるまい。○旖旎：旗が風になびくさま。○風鳶：風箏。いかのぼり。○獻歲：元旦。

歳首。○卿雲爛：「卿雲」はめでたい雲。瑞祥の象徴。『尚書大伝』

に見える「卿雲歌」の冒頭に「卿雲爛兮、糺縵縵兮」とある。「卿雲歌」は舜が位を禹に禅譲した時に群臣と共に祝賀した作。○瑞氣：めでたい気。

赤倉新居（赤倉の新居）

信越層巒擁杆欄 信越の層巒 杆欄を擁す

蓉湖北海眼前看 蓉湖・北海 眼前に看る

新居所貴非輪奐 新居の貴ぶ所 輪奐に非ず

風致山川是壯觀 風致山川 是れ壯觀

赤倉の別邸が完成したことを詠じた作。

○起句：信越地方の山々が赤倉別邸の欄干を抱くかのようにそびえている。○蓉湖：野尻湖。形が芙蓉の花のようであるので言う。○輪奐：建物の壮大で華美なこと。○風致：おもむき。風趣。

贈德富蘇峯（德富蘇峯に贈る）

蘇老元來良史才 蘇老 元來 良史の才あり

春秋班馬總淹該 春秋の班馬 総て淹該す

闡明大誥匡思想 大誥を闡明して思想を匡し

涵養精神人道恢 精神を涵養して人道を恢す

歴史家の德富蘇峯に贈った作。

○德富蘇峯：評論家、歴史家。『近世日本国民史』全五十巻で学士

院恩賜賞受賞。文化勲章受章。○良史才：良い歴史家としての才能。○班馬：班固と司馬遷。ここでは、蘇峰を中国の二大歴史家に擬える。○淹該：学問や知識が深いこと。○大誥：『書経』周書の篇名。

詣金剛寺（金剛寺に詣つ）

天野山頭夕景沈 天野山頭 夕景沈み

櫻花爛漫映松林 桜花爛漫として 松林に映ず

南河名利弔南帝 南河の名利 南帝を弔ひ

燈火滅明奉悼深 灯火滅明 奉悼深し

昭和三年四月に、河内長野の金剛寺に参詣した折の作。

○金剛寺：河内長野市にある真言宗御室派の寺院。山号は天野山。

○南河：南河内^{かわち}。大阪府南東部。○南帝：後醍醐天皇。金剛寺は後醍醐天皇の勅願寺。

遊草山温泉（草山温泉に遊ぶ）

七星山下沸靈湯 七星山下 靈湯沸き

鶴駕曾臨遺玉牀 鶴駕 曾て臨み 玉牀遺る^ぞ

今日主人情懇到 今日的主人 情 懇到なり

寛衣青藜似家郷 寛衣・青藜^{せびりん} 家郷に似たり

昭和三年四月に、台湾の草山温泉に出かけての作。

○草山温泉：台湾の陽明山前山公園周辺の温泉。草山温泉は日本統

治時代の旧名。当時、北投・関子嶺・四重溪の三温泉と並んで、四大温泉と称せられた。なお、この一帯は台湾十二勝の一つである。邦彦王は四月二十四日に神戸を出帆。台湾各地を訪問され、六月四日に帰国された。その間、たびたび草山で休養された。○鶴駕：摂政宮（のちの昭和天皇）の乗られた御車を言う。○玉牀：摂政宮が座られた腰掛。摂政宮は、大正十二年四月の台湾行啓期間中、二十五日に草山貴賓館にお出ましになった。その折に御着座のものであろう。○寛衣：浴衣を言うか。○青藜：あおい（カヤツリグサ科の多年草）。ここではイグサの莫塵を言う。台湾では「藺草蓆」と称す。○転・結句：李白「客中作」の「但使主人能醉客 不知何處是他郷」をやや意識するか。

登阿里山途遇雨（阿里山に登る途に雨に遇ふ）

白雨倏然洗客程 白雨倏然^{しゅぜん}として 客程を洗ひ

模糊雲霧罩崢嶸 模糊たる雲霧 崢嶸^{きうけう}たるを罩む

蜿蜒阿里山頭路 蜿蜒^{えんえん} 阿里山頭^{えんえん}の路

神木亭亭千歲榮 神木亭亭として 千歲栄ゆ

昭和三年五月に、台湾の阿里山に登った折の作。

○阿里山：台湾の嘉義県にある山岳地。○崢嶸：（阿里山が）高く険しい。○蜿蜒：うねりながら長く続くさま。疊韻語。

閩臺灣軍四遊草山温泉（台湾軍を閲して四たび草山温泉に遊ぶ）

閔武三句 鯤島邊 閔武 三句 鯤島の辺

竹風蘭雨子規天 竹風蘭雨 子規の天

草山頼有清心地 草山 頼よひに有り 清心の地

四人雲中浴沸泉 四たび雲中に入りて沸泉を浴びたり

昭和三年五月、台湾軍を閔兵の後、四度目となる草山温泉に出かけたことを詠じた作。

○三句：何度もめぐる。○鯤島：『莊子』逍遙遊篇の「鯤」に基づく台湾の雅称。○沸泉：当地の沸点以上の熱い湯がでる温泉。

贈清浦老兄（清浦老兄に贈る）

南極神仙扶木濱 南極の神仙 扶木の浜

春風駘蕩鴛鴦茵 春風駘蕩たり 鴛鴦しとねの茵

樞機參畫憂牛喘 樞機 參画して 牛喘ぎぎえんを憂ひ

冢宰鈞衡侍玉宸 冢宰 鈞衡して 玉宸に侍る

謡曲動塵化大衆 謡曲 塵を動かして 大衆を化し

吟詩泣鬼靖堯民 吟詩 鬼を泣かして 堯民を靖んず

龜齡不老競松柏 龜齡 老いずして 松柏と競ひ

永作皇家柱石臣 永く皇家柱石の臣と作らん

清浦奎吾に贈った作。「樞機」「龜齡」の語から、大正十一年に清浦が樞密院議長になった頃のものであろうか。

○清浦奎吾：明治大正期の官僚・政治家。法務大臣、農商務大臣、樞密院議長を歴任した。総理大臣となったが短命内閣に終わった。

首聯の「神仙」は清浦を、「鴛鴦」は清浦夫妻を、それぞれ指す。

○冢宰：宰相。○柱石臣：国家の重責を担う臣下。

四、おわりに

久邇宮邦彦王の漢詩二十首に注釈を施したが、いずれの作品も平易明快であり、親しみやすいものであった。漢詩を作る人々の中には、やたらと晦渋な詩語を用いたり、あまり知られていない典故を用いたりして得意になっているような人もいる。しかし、王の漢詩ではそのような気味は全く見られない。無為自然というか、ことさら彫琢を施すようなことがないのである。それは皇族というお育ちの良さからくるものであろう。今後は、王の書法作品に見られる自詠漢詩を翻刻して、「兼堂詩抄」を一首でも多く補っていきたいと考えている。